

## 歴史地理学研究法に関する若干の問題

山 崎 謹 哉

## 一 は し が き

歴史地理学といってもその研究課題には種々なものがあり、その対象が余りにも広範囲におよぶだけに研究に、あたってはさまざまな隣接科学の領域と関連を持ち、またその応用という面も生じてくる。したがって研究者自身においても、歴史地理学という独自の問題意識と研究態度とをもつてのぞまねばならない。私はここでは歴史地理学なるものの目的を、一先ず歴史時代の空間の復原およびその地理的意義の究明にあると理解しておき、その考えのもとに以下限られた紙数において、歴史地理学研究法に関するもつとも重要な、しかもそれが現在における基本的問題と考えられる二つのことを中心課題として述べてみることにする。

すなわち、その一つは地方史研究と歴史地理学研究との相互の立場を如何ように明らかにするかということであり、他の一つは地域性の解明ないし地理的時代区分の設定という、いずれも史的事実よりする歴史地理学独自の研究目標を再検討するということである。したがって私自身が歴史地理学に対する一個の方法論をここで体系づけようとする意思は少しもなく、むしろ方法論の確立は後に残される問題であって、今は唯それらへの足掛りとしての問題を提起するに過ぎないのである。

## 二 歴史地理学研究と地方史研究との立場

歴史学者といわず歴史地理学者を含めて歴史的な村や町の研究が最近盛んとなり、その成果も今日多くのものをみている。ところがそれら村や町の歴史地理学的研究は、多かれすくなかれ地方史研究と深い関連を有するのである。しかしそれならばその研究がどの程度地方史研究にふさわしいものといえるであらうか。あるいは唯漠然とそのような感じを抱いているのに過ぎないものであろうか。とはいえ、実際に歴史地理学および地方史の両者の既往の研究成果について検討するとき、共に深い関連を持つことは認められても、決してこの両者は帰を一にするものではないということがわかるのである。もちろん根本的にみて歴史地理学は地理学の部門に入り、地方史研究は歴史学の部門に属するという相違からでも首肯できるが、この辺でなお両者の目的についてはっきりしておきたい。

まず第一に指摘しなければならぬことは、歴史地理学者のおこなう、歴史時代の集落や交通・諸産業などの実証的研究は、すくなくとも歴史的背景を考慮に入れてのことである。一般に歴史地理学は、地理学の中でも多分に歴史性と取組んだ地理学であるから、そのねらいは飽くまで地理学的であって、史学的ではないのである。すなわち、史学は人間と人間、ないしは人間と社会の関係に主眼を置くのに対して、歴史地理学は、それら史学で問題とする点について、さらにそれを自然との関係において究明しようとすることはいうまでもない。そしてその自然とは地理的自然を意味するものであるが、果して地理的自然とはどんな内容をもつ語であらうか。このように具体的問題となると、なかなか明確な解答をするのに困惑もするが、一般に人間の社会やその歴史の中から、地形・地質・土壌・海洋・陸水・植物などの自然がなめられ、したがって自然とは無関係に、人間と人間・人間と社会との関係はとらえられないので

ある。しかしながら歴史地理学だかひといって余り地理的自然のみに重点をくきすぎると、その結果は単なる環境論それも素朴なものに墮してしまふのである。<sup>(1)</sup> 結局こういった地理的自然の見方・取扱ひ方に立脚しながら、複雑な歴史の地理性を究めていこうとするところに、歴史地理学の根本的課題が存するのである。

一口に歴史地理性を究明するといつてもそれはなかなかむつかしいことではあるが、たとえば、過去の自然と人間との關係を地域の比較研究という方法によつてなすことも一つの手段である。

他方、地域変遷史的立場から当時の景観を復原することが歴史地理学の任務であるとも考えられているし、またこれらのほか歴史地理学についてはいろいろな定義も試みられている。<sup>(2)</sup>

いま、歴史地理学の解釈を右にみてきたもののいずれをとるとしても、結局はつきのことにつきると思われる。すなわち、たとえ同じ歴史的事実を研究対象としても地理学の場合と史学の場合とでは研究成果にちがいをみるのは当然である。

たとえば、新田村に例をとつてそのことをいうと、地理学の場合自然的基礎を異にして成立している新田分布の地域的類型、さらに集落としての新田の形態や機能および性格の変化など、おもに新田村の地域構造の解明が問題となる。<sup>(3)</sup>これが史学の場合であると、歴史的事実を唯一のよりどころとして新田経営の性格や新田地主の性格づけをおこなおうとすることが問題とされる。

さて、つぎに本項での課題、歴史地理学研究と地方史研究の立場について論及してみることとする。

地方史研究はそれ自身歴史学の一部門であるから、その目的も歴史学一般のそれを外れるものではない。端的にいって地方史研究とは地域の歴史研究と考えられている。しかし地域の歴史研究だといつても、いわゆる市町村史のよう

なものを意味するのではなく、それらとは異った地域に関する歴史研究と一般に考えられている。したがって対象とした地域の範囲もさまざまであって、つまり国全体の地域を対象としない場合に地方史と呼び、それを研究するのが地方史研究である。従来の郷土史研究とは単に研究対象とせる地域の広狭のみによって區別するのではなく、根本的に研究方法にちがいのあることはいうまでもないのである。ここまで述べてくると最早地方史研究は史学研究での特殊な領域でもなく、また今日未熟な段階にあるとも考えられず、史学研究法として独立せるものとみて差支えない。

一方、歴史地理学研究をみるに、地方史研究と同じく戦後一般と活発化してきているが、その成果も戦後の特色として各地域の事例を取上げての実証的研究が目立つのである。そしてそれは地方史研究と非常に接近しているといえるのである。しかしこれまでも再三述べきったように、歴史地理学研究与地方史研究とはその目的においては一線をもって劃されるものである。その一線とはいうまでもなく史学、地理学の学問としての根本的な性格目標の相違ということを意味するのである。実際にいってそのような今日の歴史地理学の個々の研究成果をみるに、ややもすれば歴史地理学の成果というよりも、ある種の地誌―歴史地誌とみて差支えなきものと思われるものすらある。

しかもこの場合歴史地誌といってもそれは単なる固定的・静態的そして非科学的描写によって書かれた県誌・郡誌・市町村誌などいわゆる郷土地誌とは異り、目的とした地域の過去の地理的事実を総合的立場から記述したものであって、その目的は飽くまで現在の地理的事実を説明する手段としてそれらの事実を過去にさかのぼってゆくにすぎないという点におかれるべきである。もちろん歴史地理学はある過去の研究のみで終始する場合もあるが、また過去から現在へと研究範囲を拡げてゆくという使命もあるはずである。筆者はこういった歴史地理学の見方については後者の場合を選ぶ一人である。そしてこの歴史地理学研究法によってさきの歴史地誌をみると、その地誌学研究法

かにはのH・シュペートマンのいった動態的地誌学<sup>(5)</sup>研究という取扱い方が十分考えられる必要が認められるのである。つぎに最近の歴史地理学研究の傾向からいって、これまで述べてきたように実証的研究が盛んであって、ことに資料の制約もあって近世のそれは非常に進められている。それだけに地理学者の中にも中世文書や近世地方史料を読解するものが目立って多くなってきたといえるのである。したがってその取扱い方も普通、史学でおこなう方法にも熟知した上で歴史地理学独自のものを生み出すように心懸けねばならない。以下そのことに少し触れておくこととする。

既往の歴史地理学の成果からみるに折角の史料も十分に駆使しないで終っている感がしないでもないのである。その多くはたとえ、検地帳や宗門改帳に例をとっていうと、それぞれの記載事項を単に量的に把握すると、分析することに終始している。もちろんこういったことをすることによって村の戸口の状態や村高の推移構造、誰の支配に属する村であるかといういわゆる村の概要は一応知ることができるところで、そういう意味ではこの取扱い方も一つの方法ではあろうが、果してそれのみでよいのであろうか。かくいう筆者自身もこういった方法をこれまでとってきた一人であるだけに余計にかかる感じを抱くのである。なるほど歴史地理学は若い学問ではある。しかし歴史地理学の研究には常に史料が不可欠なものであるだけに、今日その取扱い方に深い反省をなすべきではないかと思う。

まず、歴史地理学者としてなすべきことは歴史学一般についての十分な知識を持ち、史料や近世文献を正しく読解する能力を養い、その上で検地帳や宗門改帳などの比較的<sup>比較</sup>的資料ともなる史料の分析をおこなうべきである。としてさらにその根拠を裏付けるため、数的史料以外の覚書や日記そのほか状ものと呼ばれる史料を十分に使わねばならないのである。もし歴史地理学研究と称しても数的史料の分析のみに終ったとすれば歴史地理学研究とはいえず、単

にナマの資料を羅列したにすぎないものになるのである。

いままで述べたことは史料取扱いの方法であつて、あるいは地方史研究の場でおこなわれるそれと共通するかも知れない。問題は一冊の検地帳・宗門改帳を検討する際の研究者自身の研究態度如何ということにあるわけである。すなわち、その研究態度によって歴史地理学研究ともいえるし、地方史研究ともみなされるのである。要するに歴史地理学における史料の取扱ひ態度はたとえそれが単なる数的史料の分析にすぎぬものであつても、その結果はこれらの史料を通して、歴史時代における地理的事象の成立具合や、進化の様相を考察するとともに、それがその時代にかなる地位を占めていたが、あるいは現在の地理的事象と如何にむすびついているかを知るためのものであればよいのである。<sup>(6)</sup>

上述によつても理解されるように根本的に歴史地理学研究と地方史研究とは目的を異にするも、その研究方法ないし研究の過程においては、両者スレ違いをみるのも当然とみられるのである。

### 三 歴史地理学における地域性探求のねらい

戦後の社会経済史学ないし地方史研究における特色の一つとして、歴史的現実の場において地域性の問題が重要視されてきたということである。その意図するところはたとえば、地主制度や本百姓・被官百姓の性格・石盛など、村落内部のすべてのものに明瞭に地域による差異が認められるからである。しかしながら実際にいつて地方史研究学者によつてなされた個々の事例的研究の成果をみるに、地域性と称しても単に地方差といった漠然とした割り方によつてそれを扱っている場合が多いことがうかがえられるのである。果して地方史研究で要請される地域性の課題はこ

のようなことで許容さるべきであろうか。もしそれでよいとすれば折角意図した課題もそれほど重要な問題を持つてゐるとは解せられないのである。

それでは地域性の探求を生命とする地理学において、一体それをどのように把握し理解しているかという点、残念ながら今日その概念についてははっきりした規定を持っていないのである。唯この場合地域性を漠然と地域の分析を通してのその地域の特性ということに仮にしておこう。そうした漠然とした把え方のもとに個別的事例研究を数多く累積し、それが固まればやがて綜合へと発展してゆき、おのずと目的的地域性探求に接近できるのである。

いずれにせよ、今日の地理学においては地理性探求の根幹となる問題に努力がはらわれており、たとえば、地域論とか地域の機能論的把握<sup>(9)</sup>・地域類型の設定など多くのものをみるにいたっている。一方これとは別に歴史地理学における地域性解明に関する研究成果をみるに、この場合一般地理学で問題とする地理性の課題とその目的においては共通をみるが、唯、対象とした地域が歴史地域つまり歴史時代の地域という点にちがいをみるにすぎないのである。如何に歴史地理学が歴史的地域―過去の地域を取扱う学問であつても現在の地域とそれが無関係ではないということ、したがつてその両者が常に因果的な関係で結ばれ、それだけにそれを観察するのに動態的方法が必要であることはいうまでもない。ここまで述べてくると最早歴史地理学の根本的課題である地域変遷史立場の問題とつながってくるのである。<sup>(11)</sup>

さて、かかる歴史時代の地域性を俎上に歴史時代の地域性を考えてみることも歴史地理学研究の課題の一つであつて、それを解明する手段としての地域区分という作業も附随的に考えられてくる。これに関してたとえば、藤岡謙二郎氏が歴史時代特に先史時代の地域区分を試みているのもその一例である。<sup>(12)</sup>氏はそこにおいて地理学が歴史地理学

であるとなつてを問はず、現実に關する地表の地誌的科學であるといふ点を強調するならば特にそれが歴史地理學にあつては復原された過去の地域の認識は、現在の地域の認識比較によつてのみ可能であるといつてゐる。そしてその實際的方法として、(1)各種の方法によつて先史時代の原景觀を復原すること、(2)編年の内容的に意味のある遺蹟遺物の分布圖を作成すること、(3)現代の地域区分を参照しながら一、二の基礎的事實をもとに先史地域の区分を試みることに、以上三つの点を指摘してゐるのである。こういつた地域区分の設定で多々問題となるのは地域の境界づけである。つまり地域の境界線を何処に引くかといふことである。これに關しては種々な問題も生じてくるが、<sup>(13)</sup>ここでは地域の境界づけの實際例として近世において領界や村界がどのような理念のもとにおこなわれていたかもみると、たとえば、紀州徳州時代の地方行政区分が地形的条件に従順で、しかも河川流域による地理的統一性をできるだけ保つと努めてゐる跡がうかがえらるのである。<sup>(14)</sup>また村界の一例は松本豊寿氏の最近の論稿によつてうかがうこともできる。もちろん右に挙げた二例が、直ちに近世における境界づけの典型的なものとは受取れがたいが、すくなくともそれをみることによつてその一端を知るのには役立つであらう。

以上、歴史地理學においてなぜ地域性が問題となるか、その探求はどのような形で展開されてゐるかなどを中心として述べてきた。究極のところ地域性の探究は地理學一般に課せられた使命であつて、社会經濟史學や地方史研究で問題とせる單なる地域差を求めただけのものではなく、さらに一步深く喰入つて、飽くまで自然的基礎に立脚しながら人間社会の一個の地域構造を究め、これを理在と結びつけながら過去の地域を主体にしておしすすめてゆくところに、歴史地理學で問題とする地域性探究の「ねらい」が見出されるのである。



## 四 地理的時代区分の検討

前項でみてきたように、歴史地理学者の中には歴史的地域区分ということについては敏感であつて、相当な努力を惜しまないのである。しかるに地理的時代区分の設定となつてはかならずしもそうとはいえないのが現状である。もつとも歴史地理学は先にもいつたように地理学の部門に入るのであるから、それほど時代区分の設定に意を払う要なしとみるむきもあるだろう。しかし歴史地理学そのものは歴史的背景を考慮した上で、時の断面を抽出して過去の原観を現在に復原することを強調する限りにおいては、歴史地理学者も地理的時代区分についてまったく無関心であつてはならないと思う。むしろ歴史地理学の特異性を生かした多くの実証的個別的な事例研究の過程の中から、歴史的时代区分とはちがつた独自の時代区分の設定がなされることを当然だといえる。今日、歴史地理学者はこういった点に着目と検討の必要があるのではなからうか。

しかしこのような歴史地理学による地理的時代区分の設定の試みは、最近の一、二の論稿に既に見出されるにいたつてきたことは喜ばしいことといわねばならない。

その一つは矢嶋仁吉氏の著作にうかがうことができる。<sup>(16)</sup> すなわち、氏は武蔵野新田の開発過程について歴史時代を背景に集落としての新田村を取上げ、かかる立場から開発期の時代区分を試みられ、江戸時代初期より幕末にいたる間を三つの時期にわけてその最後の第三期にあたる安永年間より幕末にいたる時期がもつとも新田開発が進められ、この時期をして武蔵野台地の開拓史上第一期を劃したときであるといつていられるといつていられる。

いま一つは菊池利夫氏がやはり氏の著作において全国的視野から新田開発の時期について検討している。<sup>(17)</sup> すなわ

ち、氏は寛永末期から幕末にいたる間を全国的な新田開発期とみて、この間に三回の開発隆盛期とその中間に二回の衰微期が存在していることを指摘している。しかもこの場合、その背景には常に歴史的な推移を考慮していることがみられる。

また、浅香幸雄氏は近世わが国人口の全国的趨勢を時代的に把握して、近世期を大雑把に三期（前・中・後）にわけてそれをみているのである。

これら三氏の論著から汲み取れることはいずれも歴史地理学の場において地理的時代区分の設定の必要性から歴史的時代区分に準拠しての地理的考察ということがなされていることを知るのである。

いずれにせよ、このような歴史地理学の扱え方は、とりわけ戦後発展した数多い歴史地理学研究法のうちでも特に注目されるものの一つであろう。

## 五　む　す　び

以上首題に示した通り本稿でとりあげた二、三の問題はいずれも今日の歴史地理学研究法としては大切なものである。そしてそこにある方法論上の問題にも若干論及してみたつもりであるが、従来の叙述の拙さと浅学のために結果としてはそれを十分に果しうることができなかつたことを深く謝するとともに、大方の御叱正をうれば幸甚である。

### 註

(1) 中田 栄 一 地理と歴史との間——歴史地理学への断想——富士論叢第三卷 四—七頁 昭和三十三年

(2) 藤岡謙二郎 先史地域および都市域の研究 柳原書店 昭和三十年

(3) 菊池利夫 『新田の開発 上・下』——古今書院——が新田の歴史地理学的研究としては一つの指針をあたえた書と

いえるであろう。

- (4) 地方史研究協議会編 近世地方史研究入門 岩波書店 昭和三十三年 一頁
- (5) 能 登志雄 現代の地誌学 古今書院 昭和二十四年 六八頁
- (6) 矢島 仁 吉 歴史地理学の課題 地理三卷四号 昭和三十三年 四頁
- (7) 地方史研究協議会編 前掲 四頁
- (8) たとえば、木内・西川両氏の新地理学講座所収の地域論もその一例である。
- (9) 水津 一郎 『地域論』の機能主義的展開地理評三十一卷十号 昭和三十三年
- (10) 斎藤 光 格 北上川中流部における村落構造の地域的類型 地理評三十一卷七号 昭和三十三年
- (11) 藤岡謙二郎 前掲 四四―六七頁
- (12) 藤岡謙二郎 先史地理学の一課題——地域区分の問題——地理評 二十五卷八号 昭和二十七年
- (13) D・ウイトルセイ 地域概念と地域的方法(上) 地理 三卷三号 昭和三十三年
- (14) 近藤 忠 紀州の近世における地方行政区画の変遷と村落の分合 人文地理九卷一号 昭和三十三年
- (15) 松本 豊 寿 近世初頭の村落その構造と村境について 社会経済史学 三四卷三号 昭和三十三年
- (16) 甲矢 島 仁 吉 武蔵野の集落 古今書院 昭和三十年 六八―六九頁
- (17) 菊池 利夫 新田開発上巻 古今書院 昭和三十三年 一一九―一三一頁
- (18) 浅香 幸雄 中・近世の人口 新地理学講座第七卷所収 朝倉書店 昭和二十八年

(附記)

本稿は既にその要旨を昭和三十三年十一月二十九日、立教大学における日本歴史地理学研究会第一例会で発表し、今回それに補訂を加えたものである。なお、席上において諸先生方より有益な御指導を得たことを深謝する。